

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者を支援するあなたのための情報紙です。



特集

子どもを育む 地域の場

愛島東部団地仮設住宅で行われている寺子屋閣上の学習会。みな集中して取り組んでいます。

特集◎子どもを育む地域の場

●寺子屋 閣上（ゆりあげ）（宮城県名取市） 3

●特定非営利活動法人アスイク（宮城県仙台市） 5

☆専門家に聞く地域づくりのヒント

特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン

代表理事 高橋信也さん（北海道釧路市） 7

●よしじま燦燦塾（さえずら）

特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク

（山形県川西町） 8

●Zっと！Scrum（すっと！すくらむ）

特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン

（北海道釧路市） 8

生きがい仕事②鶴亀会（宮城県仙台市若林区） 9

まちの仕組み①女川町ころとからだとくらしの相談センター
（宮城県女川町） 10

場の力◎集いから生まれる活力②

特定非営利活動法人巨理いちごっこ（宮城県巨理町） 12

インタビューあの人に会いたい②

特定非営利活動法人J'in 代表 川村博さん（福島県） 13

市民リレー◎東北の元気②

ひよっこりひよったん塾（岩手県大槌町） 14

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ 15

元気がでるまちづくり②

とうふの会（秋田県湯沢市） 16

・読者の声
・購読者を募集しています！
・次号予告
・編集後記





b

特集



子どもを育む地域の場

子どもたちの生活を手助けしようと、さまざまな団体が学習支援を行っています。

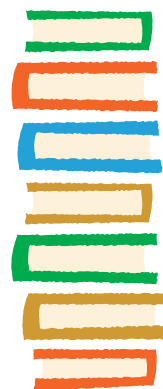
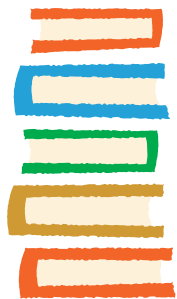
“学習”といっても、ただ単に勉強を教えているだけではありません。
今回ご紹介する、特定非営利活動法人ロシナンテスの行う「寺子屋^{ゆりあげ} 閑上」は、
名取市閑上に生まれ育ち、被災という同じ経験をした、
元学習塾経営者の工藤博康さんが先生となり、世代を超えて
子どもたちと一緒に成長する場所をつくりあげています。
また、仙台市を中心に活動する、特定非営利活動法人アスイクの行う学習会は、
同じ人が継続して子どもたちとかかわってきたことで

お互いが元気を与え合う居場所になっています。

さんさん 燦々塾^{ずっと}（山形県）やZっと！Scrum^{すくらむ}（北海道）では、子どもだけでなく、

大人や高齢者の居場所にもなっていました。

子どもたちとしっかりと向き合い、心に寄り添う活動から、
かかわりのヒントが見えてきます。





子どもたちに勉強を教える工藤博康さん



寄り添う学習支援

◎寺子屋 閑上ゆりあげ（宮城県名取市）

閑上ゆりあげの子どもたちに寄り添うのは自分しかない

「寺子屋 閑上」は震災前、宮城県名取市閑上で塾経営をしていた工藤博康さんが、アフリカで医療支援活動をするNPO法人ロシナンテス（福岡県北九州市）の一員として始めた仮設住宅での学習支援活動だ。学習支援をとおして子どもに寄り添う。そんな思いで、「寺子屋 閑上」は開催されている。

閑上で医療支援活動を行っていた、ロシナンテス理事長川原尚行さんのスーダン共和国での活動の講演を、避難所で聴いたことがきっかけとなった。避難所での子どもたちの学習環境の悪さや、小中学校の再開のめどが立たないことからくる「学習の遅れ」が気になっていた。「被災という同じ体験をしているからこそわかることがある。学習をとおして子どもたちに寄り添う」ことが、自分の役割だ」と工藤さんは決意した。

「閑上の子どもたちの学習を支援するのは自分しか

いない」講演終了後、川原さんに思いを伝えた。翌日からロシナンテスの一員となった。

「寺子屋 閑上」の開講

避難所では、子どもたちが学習するスペースの確保ができず、ロシナンテスのスタッフが寝食する圓満寺えんまんじを借りて、活動を開始しようと考えたが、避難所から遠く子どもたちが通うことができないと判断し、仮設住宅の完成・入居にあわせて集会所で開校することにした。計画の当初、お寺での開校を目指していたことから、この無料塾の愛称を



「寺子屋 閑上」開校式（川原尚行さんと）



「寺子屋 閑上」
(特定非営利活動法人ロシナンテス)

工藤 博康さん

「勉強を教えながら、
実は一緒に成長しているんだよ」

「〇〇塾」ではなく「寺子屋」とした。

最初に、どの仮設住宅に子どもたちが入居するのかを把握することに努めた。その結果、小中学生の子どもをもつ世帯が入居するのは、箱塚仮設住宅、箱塚敷仮設住宅、愛島東部仮設住宅の3か所であることが判明し、各仮設住宅を巡回しながら、小学生1時間、中学生2時間の学習体制をとることにした。

「寺子屋 閑上」の活動

「仮設住宅の狭い住宅環境は、自宅と違い、家にもなくてもなんだか落ち着かず、暮らしに余裕をもちにくい。これは大人だけではなく、子どもにも言えることだ」と工藤さんは話す。狭い仮設住宅は、避難所同様の学習スペースの確保が難しい。子どもたちが落ち着いて学習する時間をもてるように心がけている。授業は宿題を中心に行い、各自がわからない部分を工藤さんに教えてもらう形式だ。

「寺子屋 閑上」は、学習



寺子屋での授業風景

スペースと「学習時間」の確保という役割を果たしているだけでなく、「学年を超えた交流の場」となっている。「寺子屋 閑上」では、小1から小6までの子どもたちがともに学び、中学生も1年生から3年生まで一緒に学習する。学年を超えて学習するスタイルは、工藤さんが閑上で塾をしていたときから変わらないう。学年や世代を超えて交流できるコミュニケーション能力を築いてほしいという工藤さんの願いのあらわれだ。

世代を超えて

「今回、子どもたちは、震災というつらい経験をしたが、世界中の人々からの支援を受け、また周りの大人たちが頑張る姿を見てきたと思う。心の深い痛みを知ると同時に、人の心の温かさを知った。それを活かしながら、子どもたちがたくましく成長できるように見守っていきたい」と、工藤さんは話す。

「寺子屋を通じて子どもたちにずっと寄り添う」この言葉は、子どもたちと同じ津波を体験した閑上の住民である工藤さんだからこそ、重みをもつ言葉だ。子どもたちの変わらぬ元気な姿は、大人たちの活力につながる。「子どもたちを不安にさせてはいけない、子どもたちを元気にしないと……と大人は考えがちだけど、子どもは大人が思っているほど弱くないんだよ。」

大人が子どもたちから元気をもらっているんだよ」
集会所での「寺子屋 閑上」の活動を目にした高齢者から「自分たちも勉強がしたい」という声があがり、100マス計算を子どもたちと競争する試みも開始する予定だ。世代間の交流も少しずつだが増え、地域にも定着した。「寺子屋 閑上」は未来の閑上を担う子どもたちに寄り添いながら息の長い活動を続ける。



◎寺子屋 閑上◎

◆活動時間 月曜日～金曜日(祝祭日は休校)

小学生 17:00～18:00

中学生 19:00～21:00

(中学3年生は18:00～21:00)

◆詳細は下記にお問い合わせください。

NPO 法人・国際NGOロシナンテス 東北事業部

TEL 022-383-6364



JR 南小泉仮設住宅での学習会



宮城県
仙台市

継続した支援から見えるもの

◎特定非営利活動法人アスイク（宮城県仙台市）

継続的な支援

東日本大震災で被災した子どもたちの教育を支えようと、震災後、多くの団体が学習支援を行うなか、「継続的な支援」を掲げ、震災直後より動き出した団体がある。特定非営利活動法人アスイクだ。

アスイクは昨年3月11日の東日本大震災後の3月28日に発足。代表理事の大橋雄介さんは、学校が避難所となり、授業再開の見通しがたかない状況のなか、学習遅れが深刻になると考え、避難所で暮らす子どもたちへ学習のサポートを始めた。避難所が閉鎖したあとは仮設住宅で暮らす子どもたちの学習支援を行っており、現在仙台市内にある6か所の仮設住宅で週に1回学習会を実施している。参加している子どもは全体で約100人。幼稚園児から高校生まで幅広い年代の子どもたちが学習会に参加している。

関係の構築

「ただ単に学習を行うだ

けではなく、子どもたちに勉強を教えるサポーターと子どもたちとの関係づくりを重視しています」と大橋雄介さんは話す。

避難所から仮設住宅での活動に移行する際、子どものちょっとした変化やサインに気づけるように、そして、子どもたちが学習会に行くのが楽しみと思える環境が必要と考え、「関係づくり」に重点を置くことを決めた。そのため、サポーターのボランティアを募集する際には3か月以上継続できることを条件とし、仮設住宅で行われる学習会では、毎回同じサポーターが継続して勉強を教えるマンツーマンの学習を基本としている。

継続から得たもの

若林区のJR南小泉アパート仮設住宅で活動を続けているサポーターリーダーの、佐藤智基さんは、活動をこう振り返る。「きっかけは、話を聞きながら少しでも勉強を楽しんでもらいたいかなと思っていま

特定非営利活動法人アスイク 代表理事 大橋 雄介さん



「ただ単に学習を行うだけではなく、
子どもたちに勉強を教えるサポーターと
子どもたちとの関係づくりを重視しています」

す。回数を重ねるたびに、
楽しそうに勉強してくれ
て、それがうれしいです」
仮設住宅での支援が始ま
ると、子どもたちに変化が
あった。「去年まで30分く
らいで勉強に飽きてしまっ
ていた子が1時間集中でき
るようになったり、自分の
名前をひらがなでしか書け
なかった子が漢字で書ける
ようになったり。成長して
いるのが、どの子からも感
じられます」。継続して活
動しているからこそ、一人
ひとりの成長がより感じら
れるのだろう。

JR南小泉アパート仮
設住宅の学習会を訪れる
と、時間より早く来て、サ
ポーターとの会話を楽しむ
子や、始まりの挨拶時にサ
ポーターと頭をぶつけ笑い
合う子がいたり、集会所
は子どもたちの笑いであふ
れていた。子どもたちとの
関係づくり、そして継続し
て支援を続けることの成果
が伝わってくる光景だ。サ
ポーターの加藤史也さん
は、学習会について「勉強
をとおしたコミュニケーション
子どもたちだけでなく、自

分にとっても大切な居場所
になっていきます」と話す。
子どもたちだけでなく支援
するサポーターも元気をも
らっているのだ。

支援の方向性が見えた！

アスイクではサポーター
の研修に力を入れている。
学校法人河合塾の講師と連
携した学習指導力向上研修
やコーピング研修のほか、
阪神・淡路大震災の際に活
動していた団体の協力を得
て、被災した子どもとの接
し方や注意点について学ぶ
研修など充実した内容だ。

また、拠点とする各仮設住
宅のサポーターリーダーが
集まって月に1回、ミー
ティングを行い、状況把握
や情報共有に努めている。

子どもたちへの継続的な
支援、そして現場の主役で
あるサポーターへの徹底し
た研修により、学習会は、
子どもたちの居場所づくり
と学習支援がうまくかみ
あっている。

現在、仮設住宅での学習
支援以外にも、民間の借り
上げ住宅に入居している子
どもや、被災に関係なく経

◎ NPO法人アスイク◎

●学習サポート活動拠点 ※すべて無料

《若林区》

- JR南小泉アパート仮設住宅：月曜日/18:30～19:30
- 荒井小学校用地仮設住宅：木曜日/19:00～20:00
- 卸町5丁目公園仮設住宅：金曜日/19:00～20:00

《宮城野区》

- 仙台港背後地6号公園仮設住宅：火曜日/19:00～20:00
- 鶴巻1丁目東公園仮設住宅：水曜日/19:00～20:00
- 扇町1丁目公園仮設住宅：水曜日/18:30～20:00

●直営学習支援センター

- 19Tsutujigaoka
火曜日～金曜日・19:00～20:30 (住所は本部と同じ)
- 泉区放課後個別学習サポート(イトーヨーカドー泉中央店)
月曜日・水曜日・18:00～20:30 (仙台市泉区泉中央 1-5-1)

※学習サポーターのボランティアを募集しています。
興味のある方は、お問い合わせください。

〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡 5-3-21 コーポ小松 101
TEL 022-781-5576 <http://asuiku.sendai-net.com/>

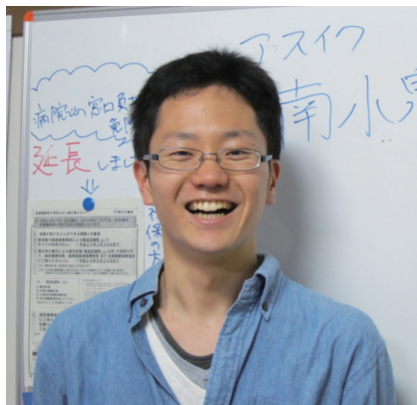
※学習会の様子など、毎日ブログを更新しています。ぜひご覧ください。



熱心に研修を受けるボランティアたち



避難所での学習支援



学習サポーターの加藤史也さん



サポーターリーダーの佐藤智基さん

済的に厳しい家庭の子どもに対する学習支援として、仙台市内2か所で学習支援センターを開いている。各家庭の経済状態に応じて、月5千円から1万2千円で、会の会費の支え合い制度を設けている。

子どもたちと丁寧なかかわりを積み重ねてきたアスク。その場限りの支援でなく、長く真摯に向き合う姿勢に、これからの支援のあり方の方向性が見える。学習会での子どもたちの笑顔がそれを物語っている。アスクが撒いてきた種は、震災を乗り越えた子どもたちの心に見事な花を咲かせることだろう。

音

実践者に聞く地域づくりのヒント!

場は提供するものではなくて、
一緒につくるもの



特定非営利法人
地域生活支援ネットワークサロン代表理事

高橋 信也 (たかはし・しんや)さん

前職は車の板金塗装や鉄工所で鉄と向き合う毎日。2007年8月からNPO法人地域生活支援ネットワークサロンに勤務し、コミュニティハウス冬月荘のコーディネーターとしてスタート。冬月荘の住人やスクラムに集まる中高生から日々教えられ、「コーディネーターとは何か?」を問い続け、今に至る。2008年4月より理事。2012年6月より現職。

コミュニティハウス冬月荘で、生活保護世帯の中学3年生を対象としたZっと! Scrum (みんなで高校行こう会) がスタートして丸4年半が過ぎました。今年の夏からは第6期がスタートしています。第1期スクラムメンバーはすでに社会人となり、ハタチになりました。私は前職から、何も知らないNPOの世界に転職し、Zっと! Scrumや冬月荘の住人を通じて社会を知っていくなか、たくさん学ぶ機会に遭遇しました。

特に、Zっと! Scrumの活動では、“場を提供する”のではなく、“場を一緒につくる”経験をしながら、自分たちのやっていることを振り返り、意味づけしてきました。Zっと! Scrumは子どもの学習支援という一方的な場ではなく、大人の居場所としても存在しています。ここでは中学生以外は誰でもチューターなのです。福祉事務所のケースワーカーがネクタイを外し、勉強を教えながらくつろぐことやアウトローなBarのマスターがマジックを披露することもありました。Zっと! Scrum卒業生も自分の勉強をしつつ、語ったり教えたり、誰もが主役

になり得る場です。寺子屋閑上の工藤さんのお話にある「学習支援をしながら、実は一緒に遊んでいるんだよ」や、NPO法人アスクのサポーターの加藤さんのお話にある「子どもたちだけでなく自分にとっても大切な居場所になっています」という言葉の意味がとてもよくわかります。

私たちは、“大人が一定の常識や価値観のもと、子どもを評価する、何かを教える、提供するという一方的で固まった場になっていないか?” そんなことを中心に、スタッフ自身がどうかかわれたか? について振り返るようにしています。1期生のメンバーの一人は「ここにはすぐそばに実現がある」と表現し、また3期生の一人は「大人としゃべれるようになった」と言いました。「ここは互いに存在を認め合える」というチューターの言葉も印象に残っています。

被災地はもちろん、全国さまざまな地域で学習支援を通じて当たり前の機会を保障し、学び合える場が必要とされていることを記事を読んで改めて感じました。

全国の学習支援



子どもと高齢者が互いに
授業を参観、交換授業もある
さんさん
よしじま燦燦塾

◎特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク
(山形県川西町)



752戸が暮らす山形県川西町吉島地区では、1960年から地域活性化を推進してきた吉島地区社会教育振興会が母体となり、2007年に全世帯が加入する「特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク」を設立。「地域の総合力を活かした地域づくり」を掲げ、防災・防犯、子育て・高齢者支援、産業の創出、環境保全などに取り組んできた。

なかでも、高齢者の生涯学習と介護予防の場として月2回開く「よしじま燦燦塾」は人気がある。地元、吉島小学校の空き教室を利用し、毎回さまざまなテーマで開催しており、休憩時間を小学生の授業と15分ずつすることで、お互いに勉強している状況を見ることができるとのこと。お互いの授業を体験する「交換授業」も行われ、高齢者が楽器を演奏する場面もあって、「相互の学習意欲が高まる」と教師からも好評だ。

家で子どもや孫たちに話し聞かせられるように「昔語り」の講座があったり、落語を聞く会を開いたり、

総合型スポーツクラブとの連携で、自分の運動能力を調べる機会をつくるなど、高齢者と地域の安全への配慮を兼ねた講座もある。ときには地元の老舗旅館を会場に、おいしい食事付きの健康体操と温泉入浴も楽しむという。「デイサービスに行くよりも楽しい！」授業なので、回をおうごとに参加者が増えていく。ユニークな仕かけで、地域の連帯意識の高いコミュニケーションづくりを有言実行中だ。小

大人も子どもも自然体になれる場所

ずっとすくらむ
Zっと! Scrum

◎特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン
(北海道釧路市)

北海道釧路市米町に建つ「地域福祉拠点」、それが、特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロンが運営するコミュニティハウス冬月荘だ。性別や世代の違う人々が集まり、遊びや食事、勉強などさまざまな活動が行われている。そのなかの一つに、生活保護受給世帯の中学3年生を対象にした学習支援「Zっと! Scrum」がある。

2008年1月に始まり、今年度で6期目になる。受講料は無料で、活動時間をどう過ごすかは中学生次第。Zっと! Scrumをどういうふうにするかは必ず中学生たちと話し合う。基本は中学生に委ね、一緒に考えるところに姿勢なのだ。夏休みに開始され、7〜9日間の短期講習のような形になっているが、次の冬休みまで活動を継続したいかを尋ね、1人でも続けたいと言えれば続行する。

子どもたちに勉強を教えるのは、チューターと呼ばれる大人たちだ。地域に住む社会人や大学生

だけではなく、Zっと! Scrumに参加していた子どもたちも中学校を卒業したあとにチューターとしても参加しており、大人よりむしろ中学生の気持ちをよくつかんで、よき話し相手になっている。

参加する中学生たちは、気を張った学校生活では見せない自然体の自分を出せるようだ。それはチューターと呼ばれる子どもたちにも同様で、Zっと! Scrumは子どもと大人、双方の居場所となっている。普





宮城県
仙台市

「復興」への願いを込めた ストラップづくり

鶴亀会(宮城県仙台市若林区)

毎日笑顔の絶えないこの場所から、「復興」への願いを込めたストラップが生まれている。代表の最知幸子さんがリハビリとして行っていた折り紙が、現在のストラップづくりにつながっている。震災後、ケガで腰を悪くしていた最知さんが、集会所でつくって

いた。仙台市若林区の荒井小学校用地仮設住宅に、一日中女性たちの笑い声の絶えない場所がある。鶴亀会の作業場となっている集会所だ。この仮設住宅団地には、震災以後、慣れ親しんだ土地を離れ、不慣れな仮設住宅に不安を抱きながら、約200世帯ほどが生活している。

「福幸(復興)カエル」。もう一つは、集会所に集まるきつかけとなった折り紙の多面体作品「福幸ふうせん」。そして、めだたい亀にあやかった「福幸かめストラップ」だ。「復興」の文字を「福幸」に変え、持っている人に幸せや福が訪れ

た折り紙の風船を見た人たちが、それを教えてもらおうと集会所に集まるようになったのだ。それが鶴亀会の結成へとつながり、復興への思いを形にしてみんなに知ってもらおうと、作品づくりが始まった。現在、3つの商品がつくられている。一つは、最知さんの地元深沼海岸でよく採れたシジミの貝殻を使う

「つい夢中になるが、あまり体に負担がかかりすぎないように一日につくる量を少しにして、お茶を飲んだり、話をしたりする時間

るように願いを込めてつくっている。現在は、40歳から80歳代までの幅広い人たちが、自分の体調や都合に合わせて参加している。お茶を飲みながら、これまでの生活のことやこれからのことを話しながらのゆつくりとした作業だが、これが心や体のリハビリ、またコミュニケーションにつながる。最知さん自身もこの作業をおして、悪くしていた腰が少しずつよくなってきた。



代表者の最知幸子さん

を多くして「逆に体を壊す原因にならないといいけどね。みんなお年寄りだから(笑)」と最知さんは話す。参加者も少しずつ増え、ゆつくりと無理をしない鶴亀会の活動は、地域の活動として定着しつつある。竹



楽しく作業は進みます



5月の仙台青葉まつりでブース販売



手づくりの商品たち



まちの仕組み

宮城県女川町

◎女川町の被災支援の状況

女川の復興は女川町民全員の手で創り出す

女川町こことからだとくらしの相談センター

こことからだとくらしのケア

「第一に、こことからだとくらしのケアをしなければ、生活は成り立たないと思っただけです」と話すのは、「女川町こことからだとくらしの相談センター」のディレクター、保健師の三浦ひとみさんだ。

東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた女川町では、町民の健康を守るため、2011年11月、女川町の地域福祉センター内に「女川町こことからだとくらしの相談センター」(ここからセンター)を開設。被災者支援の中核を担っている。

開設当初は「ここから専門員」と呼ばれるケアマネジャーや看護師といった専門職が仮設住宅のある8つのエリアごとに1人体制で活動にあたっていた。2012年5月より、女川

町社会福祉協議会職員による「くらしの相談員」が各エリアに2人配置され、石巻市内に建つ女川町の仮設住宅を含む、7か所の仮設住宅の集会所などに活動拠点として設けられたここからセンターのサブセンターに、ここから専門員、くらしの相談員の計3人体制で常駐している。住民のここ

とからだとくらしの相談に應じるのはもちろんのこと、訪問活動やイベントの企画、暮らしと健康に関する情報提供などを行っている。

声にならない思いに耳を傾ける

女川町では、ここから専門員をケアマネジャー、保健師、看護師、保育士といった有資格者に限定している。これは震災直後に、住民の声にならない思いを察知できる人材の必要性を感じ

じたからだとくらしという。ここから専門員は、住民の些細な変化に気づき、住民の抱える多様な相談に対応し、かつ、必要に応じて福祉・医療機関につなぐ役割を担う。

ここから専門員とくらしの相談員は、事前に専門員の役割や、具体的な事例をとおしてサポートセンターの役割を学ぶ研修を受講している。活動の目的を全員が共有し、確認し合うためだ。「どう支援するかは活動する仮設住宅によってそれぞれ。けれども根本の部分の思いをひとつにしたい」と活動自体があいまいになってしまおうと、ここからセンターのディレクター、佐藤由理さんは語る。

縦と横のつながり

ここからセンターでは、さまざまなミーティングが定期的に行われている。こ

表1 女川町こことからだとくらしの相談センター組織図

こことからだとくらしの健康相談センター

- ディレクター (チーム内コーディネーター)
氏名 保健師
保健師
- マネージャー (事務職員)
氏名 健康福祉課参事
氏名 健康福祉課長補佐

サブセンター名			ここから専門員 (各1)		くらしの相談員	地域包括支援センター	保健センター	PT・OT
No	サブセンター	担当仮設と行政区	担当者	受託事業者	社会福祉協議会	女川町	地域医療センター	
1	第1小学校仮設集会所	浦宿1区・浦宿2・浦宿3 1小仮設	(ケアマネ)	(社福) 元気村	2人	1人	保健師1 看護師1 栄養士2	OT1
2	旭が丘集会所	旭が丘 旭が丘仮設	(保育士)	(社福) 永楽会	2人			PT1
3	勤労青少年センター	大沢、針浜、針浜仮設 上2、3、上4、上5、西区	(ケアマネ)	ばんぶきん(株)	2人	1人	保健師1 栄養士1 看護師1	PT1
4	清水仮設集会所	清水1区、清水2区、清水 3区、	(ケアマネ)	ばんぶきん(株)	2人			PT1
5	多目的運動場仮設集会所	多目的施設、女川1区 小栗、五部浦	(保健婦)	女川町社会福祉協議会	2人	1人	看護師1 保健師2 栄養士2	OT1
6	野球場仮設集会所	野球場仮設、宮ヶ崎 石浜、北浦	(看護師)	女川町社会福祉協議会	2人			PT2
7	石巻バイパス仮設集会所	石巻バイパス 流留、蟹田	(看護師)	女川町地域医療センター	3人	3人	保健師1 看護師2 栄養士1	PT・OT
8	こことからだとくらしの相談センター	出島、寺間、江島						

こから専門員、くらしの相談員が、情報交換や活動に関する相談の場として、それぞれ月に2回ずつの定例ミーティングを行うほか、

月に1回関係機関が集まるエリア会議、各サブセンターの運営を町から受託している事業者同士の受託事業者会議、支援にかかわる



宮城県
女川町



上) 左から 佐藤毅さん、三浦ひとみさん、佐藤由理さん
下) サブセンターにて打ち合わせ中

さまざまなミーティングが定期的に行われている

関係者全員での全体会議が行われ、女川町全体の課題やよりよい地域づくりを話し合っている。

エリアという横のつながりだけでなく、専門員同士、受託事業者同士といった縦の連携も図り、全体での話し合いの場を設けることで、訪問回数など、エリアによる活動の不等等さの解消にもつながっている（表1）。実際に、「こういう縦と横が話し合える機会があることは、自分たちの活動を改めて見直す機会にもなっている」との声が聞かれている。

石巻バイパス仮設住宅の集会所にあるサブセンターで活動するここから専門員とくらしの相談員にも話を伺った。石巻バイパス仮設集会所サブセンターは入居者が多いため、ここから専門員1人とくらしの相談員3人の4人体制になっている。朝と夕方には必ずミーティングの時間を設け、その日の活動の確認を徹底して行う。「住民についての話が一番多いんです。訪問時の様子を伝えたり、どう支援していこうか、みんな

で考えています」。そう話すのは、ここから専門員の石森正美さん。「ここから専門員とくらしの相談員は違う組織からきています。そのため、可能な範囲ですが、お互いの情報共有ができるので、住民一人ひとりに対し、より深くかわわっているのではないかと感じます」

複数の事業所で行っている今の活動を、支援員ではない住民も一緒にやって取り組んでいきたい。住民の自主的な活動になっていけば」と、ここからセンターのマネージャー、佐藤毅さんは語る。ここからセンターのエリア会議に自治会や民生委員が参加したり、ボランティアとつুক্তった農園のそばに住民たちがテントを張り、憩いの場をつくったりと、各仮設住宅で住民の主体的な動きが生まれてきている。自治会のほかにも、町の聴き上手ボランティア養成講座を受けた住民たちが『聴き上手の会』を結成し、町内で活躍している。

住民主導の活動へ

ここからセンターの活動運営には、女川町の複数の事業所がかかわって活動・運営を行っている。サポートセンター開設の動きが各地で起こった際、一事業所での運営を望む声が行政のなかでも出たが、女川にゆかりのあるさまざまな事業所がかかわることによって、女川町全体での活動につながりやすいのではないかと、みんなが一体となって取り組むことに意味があるのだという考えに至った。「女川にかかわる

お話を伺った3人の人たちは女川の今後について、「今からは自分たちの力で将来を描いていかなければいけない。他県から支援に来てくれた方々が提案した復興への道筋を女川の土壌でどう実践できるかは女川の住民が考えなければ」と話す。再び活気ある元気なまちに戻ることを信じ、女川町は動き出している。

多様な立場からの情報交換が、それぞれの仕事に活かされている。

管



地域の笑顔が集う場所は
地域の笑顔をつなぐ場所

心の循環は

地域の力を育てる。

支援から心の循環へ

顔と顔がつながり

地域がつながる

支援のなかに
“心”を入れて、
継続性のある活動を行いたい



代表の馬場照子さん



仮設住宅の住民と地域の人たちが参加した体操教室



地域交流のためのサロン



いちごっこの日替わり定食 (350円)



巨理いちごっこの拠点

巨理いちごっこの活動拠点となるカフェレストランは、仮設住宅の外にあるので食事をとるだけでなくボランティアなどの支援者と地域の人の交流の場となっている。地域の人たちみんなが使える場にするには、被災者支援という視点ではなく、地域の活性にもつ

ながる。巨理いちごっこが開催するイベントは、多くの人が参加できるようにと、地域の会館を使うなど、工夫されている。「被災者向けのイベント」ではなく「地域のイベント」とすることで多くの交流が生まれる。「イベントで知り合った人たちが、いちごっこ以外の場でも交流できるのが一番いい」と代表の馬場照子さんは話す。このような場をおして、手紙のやりとりなど、いちごっこを介さない交流も増えてきている。

「支援のなかに“心”を入れて、支援とはとらえず、家族のような当たり前のこととして活動していきたい」と話す馬場さん。巨理いちごっこでの交流が地域と仮設住宅の間の偏見を少しずつ取り除き、支援者と地域住民、被災者の“心”がつながり、地域がつながり始めている。

竹

命に満ちあふれた里へ

福島県◎特定非営利活動法人 Jin 代表 川村博さん



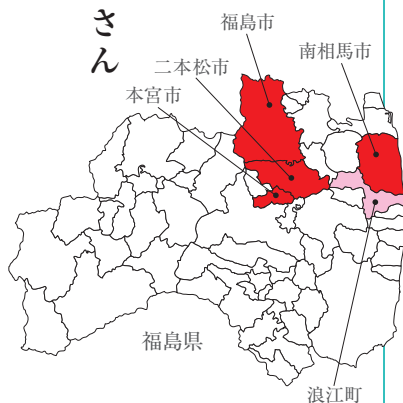
★ jin のキャラクター (芋虫)

共生・自立支援

浪江町時代は、「リハアクテイヴセンターTAIYO」を開設し、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のスタッフ8人とチームを組んで、町外へ出張しながら、2歳半から100歳までの人のリハビリ・自立支援を行っていました。

昼食時には、障がいのある人たちと一緒に育てた無農薬野菜や卵を食卓に並べ、味噌や納豆も手づくり。私には「健康な心と身体をつくる基礎は食べ物だ」という信念があります。幼稚園児に、鶏が卵を産む姿を見せ、食育や命を学ぶ場も設けていました。

東日本大震災後は、一時避難先の体育館や、二次避難先の旅館・ホテルで体操教室を開き、生活不活発病の防止に努める一方、浪江町にサポートセンターの設置を提案し、2011年10月から二本松市・本宮市で、2012年2月から福島市で運営を受託し



★リハビリもできる「浪江町サポートセンター本宮」(二本松市)

ました。サポートセンターでは、未就学児の一時預かりや小学生の学童保育、配食、居酒屋、サロン・体操教室、リハビリのできるデイサービスなどを行い、ヤギやハムスターも飼っています。また、浪江町時代からつながりのある障がいのある女性から、千葉県の入所施設に避難したくないと聞き、さまざまな在宅支援を行い、現在、サポートセンターの職員として雇用しています。

諦めきれなかった無農薬野菜づくりは、南相馬市に畑を借り、今年4月に再開しました。来年度は、ここで障がいのある人のために就労継続支援A型事業と、日中の活動を提供する生活介護事業を始めます。子どもから障がいのある人、高齢者までが一緒に過ごせる、命に満ちあふれた里にすることが夢です。(談)

川村博さんは、福島県浪江町で2005年に特定非営利活動法人Jinを立ち上げ、リハビリに特化した高齢者・障がいの者のデイサービスと、障がいのある子どもの児童サービスを運営してきた。現在、避難区域となった浪江町に帰れる日を夢見て、二本松市と本宮市、福島市で浪江町サポートセンターを運営受託する一方、南相馬市で障がい者とともに無農薬野菜づくりに励む。

2回目

市民リレー

東北の元気

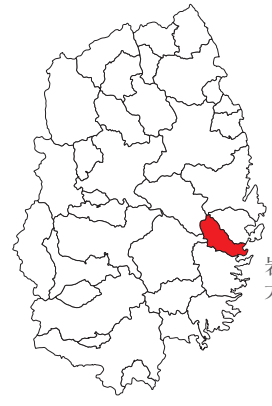
東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

大槌の未来を考える

ひよっこりひょうたん塾

◎岩手県大槌町
Witer 元持幸子



岩手県
大槌町



フィールドワーク◇被災の街中を歩く



散歩会◇ひょうたん島を眺めながら



散歩会◇まちの方と地図を広げながら

創造性と多様性を兼ね備えた、未来の大槌町を担う人材を育成するために、芸術文化・コミュニティデザインという手法を活用した「塾」がスタートした。塾の名前は大槌湾に浮かぶ蓬萊島^{ほうらいじま}、別名「ひよっこりひょうたん島」からとった。町民にとってこの島は大槌町のシンボルだ。

これからのまちづくりを行政と住民、NPOなどが連携して進めていくきっかけになるよう、塾は「野点^{のたん}」と「まちづくりゼミ」の2つの柱のもと、月1回行われている。20歳代から80歳までの幅広い世代が参加する。

野点では、野点を開催すること以上に、事前にお散歩会と称し、震災前の記憶や町内の思い入れのある場所を巡り、語り合うことを大切にしている。「こは、小さい頃遊んでいた公園だった」「こは、関所があった場所で歴史があるとこらだよ」など、記憶のなかの町並みや以前の生活様式などを語ることで、震災後の



ひよっこりひょうたん塾★事務局
〒028-1131 大槌町大槌 24-24-2
TEL 090-6229-24621
E-mail hyoutanjuku@gmail.com
http://hyoutanjuku.jimdo.com/

地域資源を再発見・再認識・再考をする機会となっている。

「まちづくりゼミ」では、ソフト面でまちづくりに関わるコミュニティデザイナーや、研究者、実践者などを講師に招き、人のつながりや住民の意向や力を活かす方法などを実例をおして学んでいる。

ひょうたん塾から、町内会や自治会など既存の地域コミュニティ枠を超えた地域の人々の交流促進や、大槌町らしいまちづくり・地域らしさが生まれてくることを期待したい。

「被災者支援の今」

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4

宮城県社会福祉会館 3階

TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

東日本大震災から1年半、当サポートセンター支援事務所が開所して1年。被災者は、仮設住宅、みなし仮設、自宅で生活しながら、地域の復興、生活再建に励む日々が続いている。

サポートセンターをベースに被災者支援にかかわる従事者も、その多くが被災者であり、日々の支援に戸惑いつつ被災者に寄り添う努力を重ねている。仮設住宅などでの孤立死が何かと問題視されるが、基本的な対人援助を行うことで、要援護者の日々の支援に寄り添うことこそが、結果的に被災者の孤立を防ぐことになると、実感している。

今回の震災で痛感したことは、私たちは日頃から高齢者や障がい者などを支える地域づくりを大切にしてきたか、という反省である。被災地以外にも見られる「孤立死」の問題や、地域力を支える人たちを活かしきれない環境など、私たちの地域社会の課題が鮮明になった。

要援護者と呼ばれる人たちは、自らの悩みをすすんで訴えたり、相談することができない状況にある。ゆえに地域住民や支援員が彼らの生活に寄り添うことが重要で、そのための個別支援、地域支援の拠点が必要だ。そのことに震災前に気づけなかったことが、私自身の最大の後悔である。

復興住宅に多くの高齢者が入居していかざるを得ない状況が、目

の前に迫っている。仮設住宅期以降の支援のあり方を考えるとき、阪神・淡路大震災と同様に、LSA（生活支援員）のような生活支援をする人材の配置が求められる。今、サポートセンターで支援にあたっている人たちが、継続して要援護者支援にあたることのできるよう、仕組みとして創設していくことが重要だ。

多くの支援員は、緊急雇用などの脆弱な雇用環境にある。意義のある職務だと思っても、自らの生活が成り立たない状況では継続的な支援には結びつかない。従事者の多くが離職している状況がある今、仮設住宅期以降を見据えた支援体制が求められる。サポートセンター機能は、復興住宅ができたあとにこそ、真価を発揮するだろう。

◎ステップアップ研修Ⅰ【基礎研修受講者向けの研修】

[石巻研修②]

日時：10月30日(火)～31日(水)

会場：石巻市ささえあい総括センター

[女川町・東松島・石巻研修]

日時：11月21日(水)～22日(木)

会場：石巻市ささえあい総括センター

MESSAGE

サポーターのあなたへ！

支援員からの相談に
浜上さんがお答えします。

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



Q

支援員同士、あるいは支援員と仮設入居者が関係を築くための心構えを教えてください（支援員からの相談）

A

人間関係ほど、難しいものはありません。そして、素晴らしいものはないと思います。職場や家族の人間関係は、嫌になってもそう簡単には逃げることはできません。そこにまた、深い意味があると思います。

人間関係づくりは「信頼関係づくり」と言い換えることができますが、その際、最も大切なことは、自分自身との関係です。あるがままの自分をゆるし、肯定し、愛すること、心を開く努力をすること。そうすることで、他者をゆるし、肯定し、思いやることができます。そのうえで、純粋に「何のために、誰のためにこの仕事をするのか？」「何とかこの方の力になりたい」という思いをもち続けることが大切だと思います。

そして、相手のなかに隠れている素晴らしさ、よさ、光を見出す努力をしたいものです。自分を尊重し、相手を尊重することで、信頼関係の基礎が生まれます。

人は、自分をダメな人間だと思い落ち込んでいるとき、「そのままでもいいよ」と、あるがままの自分を受け止めて傍に寄り添ってくれる相手に、安心して自分を出すことができます。そして、心のゆとりが少し生まれ、「もう少し頑張ってみよう」という気になります。

“人間関係は、魂の仕事”とも言われます。人は、人間関係のなかでこそ成長します。誠実に、そして自分や相手への見方を少し広げながら、よい信頼関係を育んでいきましょう。

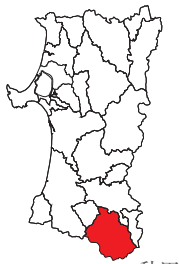
[プロフィール] 鳥取県生まれ。兵庫県川西市、大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動推進支援に携わる。気仙沼市協災ボランティアセンター支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。



「男じゃちゃ」。

男性の元気は地域の元気を育む

とうふの会（秋田県湯沢市）



秋田県
湯沢市

「町内会をつまくみんなで機能させるためにはどうしたらいいのか。秋田県湯沢市御嶽町第一町内会の会長高橋忠雄さんと庶務を務めている土田忠明さんが出した町内会再興のアイデアは、「男じゃちゃ」と呼ばれる「男同士でさつくばらんに話をする会」だった。男性の集いは地域の元気をつくり出す。

「男じゃちゃ」。「じゃちゃ」は秋田の言葉で「お母さん」。「男のお母さん」そんなふうには呼ばれる集まりがある。御嶽町第一町内会のメンバーが中心となる、男だけの食事会「とうふの会」だ。

「男だけでさつくばらんに飲み会でもしよう」とい



食卓には豆腐料理が並ぶ

う声からこの活動は始まった。この活動が「男じゃちゃ」と呼ばれる所以は、準備からあと片付けまですべて男性だけで行われることにある。会の開催日程の調整、料理の準備、あと片付けは、毎回番制で行われる。家事などしたことのない男性たちのドタバタな食事会が「とうふの会」だ。地域に密着して生活する女性とは異なり、男性はふだん地域の外に仕事に出ることが多いためじっくり話しをする機会がなく、本音で話することもほとんどない。お酒を飲みながら、他愛のない話をしながら、地域のことを気軽に話せる場をつくろうと、とうふの会は始まった。料理をする

苦勞、あと片付けの苦勞を当番制で味わう。ふだんすることのない家事をとおして、改めて家族への感謝を感じた人もいるようだ。

この会にルールはなく、会の名前にもなっていない「豆腐」を料理に使うことだけが決まっている。

「豆腐一丁あればお酒が飲める」というのがこの会のコンセプトだ。それがとうふの会たる所以なのだ。「みんなが楽しめる場所の提供」が最も大切なことだからだ。

とうふの会に影響を受けて「お茶っこの会」という女性だけの会も誕生した。男性だけの集いは、「地域の居場所を求めろ」女性たちに影響して、会の設立につながった。男性の地域活動の盛り上がりは、女性の地域活動の盛り上がりにつながり、地域の力を育む原動力になっている。竹

☆次号予告 特集「未来につなげる仲間づくり」

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。みなさまからの率直なご意見が本紙を大きく育てます。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想を FAX またはメールにて編集部までお聞かせください。あわせて、お勧めの取材先などの情報もお寄せください。うちに取材に来てほしい！という方もぜひ！

1号を読んで……

- カラー写真がきれいで見やすかったです。お友だちにさしあげたいので、2部注文いたします（仙台市・Yさん）
- 文字が大きくて読みやすいですね。他の自治会がどうなっているのか、知る術もなかったので、とても参考になりました（東松島市・Eさん）

編集後記

☆学習支援の取材で印象的だったのは子どもたちの笑顔。私が学生のときにもこんな先生、お兄さん・お姉さんがいたら…とってしまうほどでした。

購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？
お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

●購読会員 年3,600円（年12回、送料込み）

●支援会員 1口3,600円（年12回、送料込み）

ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援課または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振込ください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：02260-9-46303

加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所と、支援会員の方は②希望する送付先のあて名、または③「指定なし」と記入してください。